

「教会の誕生日」

使徒行伝 2章1節～13節

説 教 本庄侑子牧師

今日はペンテコステ(聖霊降臨祭)です。教会は誰一人、教会を立てようとか、イエス様のことをのべ伝えなくてはならないとか、考えもしなかった時、「突然」(2章2節)生まれました。

その直前、弟子たちはイエス様に、自分たちのために国を復興してくださるのはいつなのか、と問っています。イエス様が十字架の死から復活され、40日間共に過ごした後も、なお、自分たちのことしか考えられなかったのです。人間といえば、およそ教会を担うにふさわしいとは思えない姿をしていました。

教会は、信仰深い人たちが集まって、綿密な計画を立てて始めたのではなかった。であれば、今も欠けある私たちを選んで教会を立ててくださるのは聖霊なる神なのだ。そんな、聖霊や教会への信仰に立ち戻らされて、教会は今日まで導かれてきました。

しかしまた、今日の話は、ペンテコステの後、「聖霊に満たされた人間」についても伝えられています。自分たちの国のことしか考えられなかった弟子たちが、ペンテコステ以降、関わりを絶っていた人たちの所に、地の果てにまで出て行くようになりました。教会は、とんでもない変化、方向転換が起こった人たちを通して始まったのです。

復活の主と40日間も共に過ごし、その限りない愛と赦しを受けたはずの弟子たちが結局、自分たちのことしか考えられなかった姿は私たちそのものではないでしょうか。何年も礼拝生活を送ってきたのに、気がつけば、自分のことばかり考えています。自分の人生の充実。自分にとっての快適さ。イエス様の言葉だけではダメなのです。この時の弟子たちのように、聖霊に満たされなければ、私たちの心は相変わらず罪に満ちていて、自分自身の中に閉ざされています。

教会が、ペンテコステの出来事と共に思い出してきた出来事があります。旧約聖書の創世記11章に記されているバベルの塔の出来事です。神様に背を向けて、自分たちの力で、天まで届く塔のある町を建てよう、有名になろう、と言っていた人間に対して、神様は彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられないようにしてしまわれました。これもまた、私たちの姿です。同じ国の言葉を語りながらも、言葉が通じない。人と共に生きることができない。

聖霊が降った日、彼らは突然、他国の言葉を話し始めました。でも、バラバラではありませんでした。聖霊が彼らを満たし、神の大きな働きに目を向けさせ、異なった言葉のままで、それを語ることに一つにされたからです。それが、聖霊降臨から始まったこと、今も、終わりの日に至るまで続く教会の出来事です。

あの日、聖霊に満たされた弟子たちは、すべての人を救いたいという神様の思いによって結び合わされ、動かされるようになった。これまで背を向けて人たちに関わるようになり、神様があなたを愛し、赦しておられる、そのための十字架の死と復活だったのだ、という事実を、その人たちが分かる言葉で語れるようになった。

ペンテコステは一回限りの出来事でした。しかし、「聖霊の満たし」はそうではありませんでした。4章で、彼らは再び聖霊に満たされます。聖霊に満たされること。これは、私たちの誰もが生涯、求め続けて行くこと、求め続けずにはいられないことです。

弟子たちは、自分たちのことしか考えられず、見当違いの期待を抱きつつも、それでも集まって祈っていました。自分たちの内側ではなく、復活の主が昇っていかれた天を仰いで、共に祈り続けていました。天に向かって助けを求めるときは、自分たち自身なのです。神様は、そんな彼らに聖霊を満たし、生涯満たし続けて、ご自身の働きに用い抜かれました。この世界の救いの完成は、それに用いられる私たち自身の救いの完成でもあります。

私たちも心合わせて祈りたいと思います。ひたすら天を仰いで、聖霊の助けを祈り求めたいと思います。怒りや恐れに満たされたままで、今日を過ごさなくていい。赦せない、愛せないままで、人生を終わりにしなくていい。聖霊を満たしてください。私たちを一つにしてください。私たちを変えてください。そう祈り求めたい。神様は私たちのことも方向転換させ、ご自身の働きに豊かに用いてくださいます。それは、単に私たち自身のためだけではありません。私たちの家族、友人、そして、この世界全体の救いに関わる祈りとなるのです。

(記 本庄侑子)